仙台北三番丁教会
2023年5月21日 昇天後主日礼拝

# みなしごと救い主

仙台宮城野教会牧師 齋藤　朗子

聖書 ヨハネによる福音書14章15～21節
15:「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。
16:わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。
17:この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。
18:わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。
19:しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。
20:かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいることが、あなたがたに分かる。
21:わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」

『聖書 新共同訳』©日本聖書協会

---

この杯を受けてくれ どうか並々、注がしておくれ
花に嵐のたとえもあるさ さよならだけが人生だ

小説家、井伏鱒二によって日本語に訳された、「勧酒」という中国は唐の時代の詩です。わたしがこの詩を初めて知ったのは、10 代後半から 20 代前半頃にとても好きだった寺山修司の本の中でした。しかし当時、井伏鱒二訳の「勧酒」よりも心に響いたのは、寺山修司が詩につづった「勧酒」に対するアンサーソング（返答）のほうでした。このような詩です。

「さよならだけが人生ならば　また来る春は何だろう
はるかなる地の果てに咲いている　野の百合は何だろう
さよならだけが人生ならば　めぐり会う日は何だろう
やさしいやさしい夕焼けと　ふたりの愛は何だろう
さよならだけが人生ならば　建てた我が家なんだろう
さみしいさみしい平原に　ともす灯りは何だろう
さよならだけが 人生ならば　人生なんか いりません」

「さよならだけが人生だ」という達観とも諦観とも言える境地に対して、「さよならだけが人生ならば、人生なんかいりません」と、キッパリと断言し、人が人生において抱く虚しさに抗おうとする寺山修司の詩を読んで、私は、人格の奥底にある不思議な善なるものを感じて感動を覚えました。けれども、このような感動

も永続する希望となるまでには至らず、時に善や希望を思ったり、人生の虚しさを感じたりと、内面は常にゆれ動いていました。

そんな日々の中で、アルフレッド・アドラーという心理学者の著作と出会い、「すべての問題は、対人関係の課題である」という言葉に、目が開かれたような気持ちになりました。確かにあらゆる「問題」というものは、突き詰めると人同士の自我（エゴ）と利己主義（エゴイズム）が原因で関係性が壊れ、活動が「機能不全」に陥り、感情的にも受容できない状態だと思いましたし、

本日読んだみことばには「みなしご」という言葉が出てきましたが、聖書が書かれた古い時代には、一般的に、親やその他の家族がその役目を担えない場合、社会が保護者としての機能を果たすという考えは希薄でした。そういう時代に、ユダヤの民やキリスト者の間で「孤児を苦しめてはいけない、むしろ孤児たちを世話をすることこそが、汚れのない信仰心の表れである」（ヤコ 1:27、出 22:21、エゼ 22:7）という律法が生きていたことは、私たちの心に留めてよいことだろうと思います。

現在では、「みなしご」（孤児）の保護は社会の役目であるとされて、その機能を果たす組織もありますので、古代と比べれば人間は全体的に見て改善されている点があると感じます。しかしそれよりも深刻なのは、親がいる・いないに関わらず、自分をしっかりと保護してくれる人がいない不安や、生きる上で「よい人生」を選択してゆくために信頼できる導きがないという不安を抱えている子どもたちは大勢ることかもしれません。そのような子どもが、大人になってからもずっと同じ不安を抱え続けることも珍しくありません。私自身がそのような者でしたが、ここにいる方の中にも、かつては「みなしご」のような心境で暮らした経験がある方がいらっしゃるかもしれません。

さて、弟子たちとって「第一の弁護者」（一ヨハネ 2:1）、助け主、慰め主であったイエス様は、ここから十字架の死へと向かい、そして復活なさり、40 日後には天の父の元へと上げられようとしています。それ以降は、再臨の時が来るまで、もはや人の身体を持って、愛する弟子たちの前にいることはできなくなります。これらのことがすべて起きる時が来たその夜、弟子たちとの最後の晩餐を持たれた時に、イエス様は今日のみ言葉を語られました。

私が弟子たちの前から去っていったあと、彼らを守り、支え、生かし、教え導くものがどうしても必要だ。愛する弟子たちのこれからの歩みについて心を砕かれたイエス様は、父なる神に一つのことを願ってくださいました。それは、ご自分の代わりに弟子たちのために働き、弟子たちと共にいてくださる「もうひとりの弁護者」すなわち聖霊が、弟子たちに遣わされることです。弟子たちの前から去り、天にあげられた後、イエス・キリストは御自分を信じる人々に、「私は、あなたがたをみなしごにはしておかない天の父は、もう一人の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」と約束してくださいました。そしてこのイエス様がしてくださった通り、弟子たちは聖霊を与えられる経験をします。

イエス様が十字架にかけられ、墓に葬られてしまった時、自分たちを守り導いてくれたイエス様、救い主と信じて何につけ頼ってきたイエス様を失った弟子たちは、不安と恐れゆえに、自分たちの内側からカギをかけて、寄る辺のない者のように、ユダヤ人社会の中から自らを孤立させました。それだけではなく、社会からエスケープするかのごとくエルサレムを離れて、地元であるガリラヤへ戻り、不安や喪失感、虚無感をごまかすかのように湖でむなしく網を打ちました。主が墓に収められて、イエス様を失った3日間、弟子たちは「みなしご」のような心境であったと言えるでしょう。

しかし、そのような状態になってしまうことがわかっている弟子たちを、愛ゆえにそのままで受け入れ、なお

も守り導き共にいてくださろうとなさるイエス様にとって、弟子たちをはじめとする人との関係は「さよなら」で終わるものではありません。神と人との関係性は永遠に続くものであり、神の守りと導きもまた永遠のものであることが、神と人との間では最も自然なことであり、本来そうあるべきものだというのがイエス様のお考えです。私たちの側がこのことを信じられなくても、イエス様のほうが永遠の御手で私たちをご自分につなぎとめていたいと願ってくださっているがゆえに、イエス様は「聖霊」を、弟子たちに、そして私たちにも遣わしてくださったのです。

人は、聖霊というお方の働きによって、人とイエス様、また人と父なる神との関係が永遠であることを知り、それを保つだろう、あなたがたはこのことを知って、心に安心を得て、切りのない不安や虚無感から自由になり、ついには私と共に永遠に生きるだろうとイエス様は約束してくださったのです。聖霊は、天の父のもと上げられ、もはや姿を見ることはできないイエス様と私たち、また父なる神と私たちの内的な、親密な関係を永遠に保ち続けてくださるお方であり、神との関係性の中で永遠なる主の守りと導きをいただく人は、寄る辺のない、導く者のいないみなしごのような不安や恐れから解放させていただけます。

それだけではありません。主は永遠に私たちと共にいて下さる、永遠に保護し、導いてくださるという、愛する主からの約束を私たちが信じるとき、私たちは、根底に「他者との関係性の課題」を見出す数々の問題や悩みに、主による光が注がれて、問題が解きほぐされてゆくのを経験することができるようになってゆくのです。
少し前の 13 章 34～35 節を朗読します。
「あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう。」それから 14 章 15 節、「あなたがたが私を愛しているならば、私の戒めを守るはずである。」21 節、「私の戒めを受け入れ、それを守る人は、私を愛する者である。私を愛する人は、私の父に愛される。私もその人を愛して、その人に私自身を現す。」とあります。

父がイエスを愛され、イエスも父を愛する。父とイエスは人を愛され、人も父とイエスを愛する。聖霊によって、神とこのような内的な親密な関係を結ばれた人は、他者を主の愛で愛する者へとつくり変えられてゆきます。エゴを捨てて、主イエスの愛で神と人とを愛そうとするところで、お互いのエゴゆえに複雑になってしまった問題は徐々に解きほぐされてゆき、私たちが互いに愛し合う生き方は、主イエスを現すものとなり、本来もっているはずだった永遠性と神の似姿をも取り戻してゆく。このような、驚くほどの不思議な恵みに満ちた歩みをキリスト者が歩んでゆけるよう、イエス様は聖霊を私たちのそばに呼び遣わしてくださっているのです。聖霊がキリストのものである私たちの歩みを守り、助け、導き、慰め、執り成してくださっています。

「さよならだけが人生だ」と言う人。もしそれが本当なら抵抗してみようという人。「すべての問題は、対人関係の課題である」と語った心理学者。そして、いまみ言葉を読んだ私たち。すべての人にとって、「私を愛しているならば、私の戒めを守りなさい。そのような人に、私は私自身を現す。」このイエス様の言葉を真理として受け入れ、完璧ではなくても実践してゆくことで、私たちは人生への虚しさや、根底に対人関係の課題を見出すあらゆる問題に、行き詰りではなく希望を見出すことができるのです。

このような私たちの歩みに、イエスのかわりに聖霊が共にいてくださっています。私たちが今ひとたび、聖霊を信じる信仰が強められますように。次主日には、共に聖霊を受けた喜びをもって主を礼拝することができますように。

祈り